

## 一第74編一バリ・ヒンドゥー<sup>\*1</sup>の習俗

今でこそ観光の島だが、バリ島の大半の人々の生活は最近までバリ・ヒンドゥーという、バリ土着の信仰とインド仏教やヒンドゥー教が混ざり合った信仰体系で色濃く彩られていた。同島がジャワ島に本拠を置くクデイリ朝<sup>\*2</sup>の支配下に入った11世紀初め頃から、ヒンドゥー・ジャワ文化の影響が及び始める。その後しばらくジャワの支配を離れるが、マジヤパヒト王国<sup>\*3</sup>がバリを征服した1343年以後、16世紀初めにジャワのイスラム化によって同王国が滅亡するまでにヒンドゥー化が広く浸透した。マジヤパヒト王国滅亡時にジャワの貴族や僧侶が独特な文化とともに大挙してバリに亡命したためであり、現在のバリ人の大半

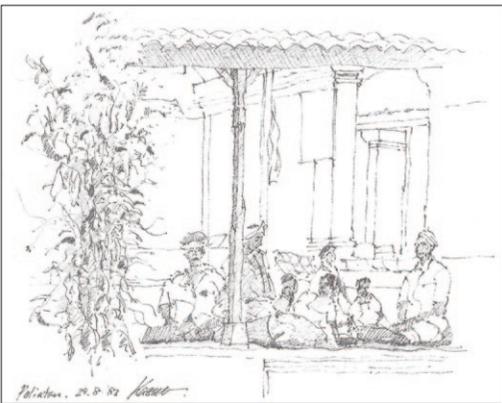


図版74-1 寺院の入口

\*1  
Balinese Hinduism:  
バリ土着の信仰とイン  
ド仏教やヒンドゥー教  
が習合した信仰体系

\*2  
Kediri: ジャワ島東部  
で繁栄したヒンドゥー  
教を奉ずる古代王朝

\*3  
Matapahit: 1293  
~1478、ジャワ島  
中東部を中心に栄えた  
インドネシア最後のヒ  
ンドゥー教王国



図版74-2 結婚式に集う近隣住人

した繊細な祭壇やお供えを見て、どこか日本神道との類似性さえ感じられたのである(写真74-1)。

このような今に伝わるバリ・ヒンドゥーの信仰体系は、内陸に散見される棚田の治水にも不可欠な地域組織によって支えられている。村総出で祝う結婚式を初めとして、部外者の我々がその機能と実態の一コマに触れることができたのは幸いであった。



写真74-1 結婚式

は王国国民の末裔であると自負している。これ以降、20世紀初頭にオランダによって植民地化されるまで、バリは独自の歴史を歩み続け、バリ・ヒンドゥーの独特な宇宙観を発展させたのであった。一般に教義よりも儀礼が重んじられるとされ、その儀礼にもアニミズム、祖先崇拜、呪術などバリ固有の文化的な特質が根強く生き続けている。そして、儀礼の根底には浄と不浄、神々と悪霊、山と海などの二元的対立や輪廻転生を信じる思考様式が存在している。これらの一端は、村の結婚式や火葬による葬儀の祀りごとの習俗に、見て取ることができた。竹を多用